

松山東雲短大 松浦千代子 ○伊藤裕子 星野ハル枝 清田美鈴 野中弥生

目的 前報までに、羊毛手織布（平織）の製織条件と織物構造との関係、およびそれら織物構造と力学特性・風合い値との関係について報告した。本報では、手織布の縫目は目くずれが起こりやすいという欠点に注目し、その原因を究明するとともに適正な縫製条件を見出す目的で織物構造と縫目の滑脱機構について検討した。

方法 試料は第3報で測定した手織布12種類（糸番手を4段階、糸密度をそれぞれ3段階に変化した）を使用した。縫製は家庭用電動ミシン（シンガー）で行い、針目の大きさは2, 3, 4 mmに設定し、縫目はポリエステル糸50番、絹糸50番を用いた。縫目滑脱の測定はJIS L1079のB法に従い、また織糸の引抜抵抗の測定もJIS L1079に従って行った。

結果 各試料とも糸密度が大きいものほど、縫目の滑脱は起こりにくい。また、たて糸曲り構造の試料はたて方向の滑脱が起こりにくく、よこ糸曲り構造の試料はよこ方向の滑脱が起こりにくい。たてよこ曲り構造の試料はたて方向よこ方向ともに、ほぼ同様の結果が得られた。カバーファクターがほぼ一定ならば、織糸の太さによる影響はあまり認められない。織糸の引抜抵抗は糸密度や織縮率に影響され、それらの大きい試料は縫目滑脱が起こりにくい。縫糸の種類による縫目滑脱の違いは認められない。これは今回用いた糸の伸度がほぼ等しいためと思われる。針目の大きさは2 mmが最も滑脱しにくく、4 mmが滑脱しやすい。以上の結果から、糸密度が小さく、織糸の引抜抵抗の小さい布ほど縫目滑脱が起こりやすいが、針目等の縫製条件によって縫目滑脱性が異なってくることがわかった。今後さらに縫製条件を変化し、最適縫製条件を見出す予定である。